

目次

はじめに	i	第三部 国語学的調査	55
第一部 本文(翻刻と注)	1	一 作者介入の表現・表記	55
第二部 史実との関係	27	二 文体	63
一 年号	27	三 用字	66
二 地名・神社仏閣	31	四 文法	77
三 人名	37	五 語彙	80
四 事物・他	40	六 音韻	81
五 地質的状况	43	七 比喩表現	82
六 治水工事	47	八 人称	83
七 交通路	48	九 引用形式	89
八 年令	51	十 国語学的意義	102
		第四部 国文学的調査	110
		一 文献資料	110
		二 口承資料	149

三 先行作品との関係―逆髪と破皿―	174
四 国文学的意義	210
五 説話文学としての『恨報実録』	212
六 現存する類似説話	216
七 破皿事件の女性	219
おわりに	221
あとがき	223
逆髪現象・破皿事件・針飯事件一覧表	225
資料一覧	228
索引	232

第一部 本文(翻刻と注)

一 作者
 まず『百子沢おはな恨報実録』の作者・成立・書誌について略述する。

未詳。ただし本書、後表紙の表の右下に「伊藤左馬之助 藤原親右衛門書」と並記されている。藤原姓が書き記したことは明白であるが、直ちに作者とは断じ難い。また伊藤姓の役割が判然としない。あるいは伊藤姓が述べたものかもしれない。また前表紙裏左下に「羽州米沢中津川伊藤新右衛門書」とあり、先の藤原姓とこの伊藤姓のどちらが先きに記したものかは不明であるが、写本の順序からみて、藤原姓が古いものかと思われる。

『村史なかつがわ』(中津川村史編纂委員会編 昭和三十五年十月刊)の資料の中に同姓同名は見当たらない。宝暦八年(一七五八)九月付の「小屋村惣百姓中証文ニシテ相渡申奉」の中の連名の中に、「百生」として「新右エ門」の名がある程度である。

二 成立
 書写年、成立年は記されていないが、次の二点から推定してみる。

①本文中に記されている年号は、「元和始」「寛永十四年」「元禄年中」「宝暦年中」であり、この宝暦年中(一七五二―一七五七)以降の成立となる。

- 8、解説不可能の箇所は□で示した。
- 頭注について

- 1、原文にある古語的表現・方言的表現の面からを主として注した。
 - 2、そのために江戸時代を中心とした辞書・文学作品、その他、方言集・方言辞典、史書等を参照した。
- 参照した主な資料の書名と略号は以下の通りである。

○節用集 黒本―黒本本、伊京―伊京集、天正―天正十八年本、饅頭―饅頭屋本、易林―易林本、書言―書言字考節用集

○方言集・方言辞典 県方県―『山形県方言辞典』（昭和四十五年 山形県方言研究会編）、米沢方言―『米沢方言辞典』（昭和四十四年 上村良作氏監修）、小国方言―『方言対照 小国方言集』1・2（昭和三十年 金儀右衛門氏編著）

○地名・歴史 日本地名―『角川日本地名大辞典』6 山形県（昭和五十六年 角川書店）、町史―『小国町史』（昭和四十一年 小国町史編集委員会）

○邦訳日葡―『邦訳日葡辞書』（昭和五十五年 土井・森田・長南氏編訳）

○パ氏日仏―『日仏辞書』（昭和四十三年 白帝社）

○ロ氏大文典―『日本大文典』（昭和四十四年 土井氏訳）

○和英語林集成（慶応三年（一八六六）J. C. HEBBURN 氏）

○『邑鑑』（慶長十年以降の作成か。昭和五十五年米沢市史編集資料第二号下平才次氏解説）

○『新版日本史年表』（昭和五十四年 歴史学研究会編 岩波書店）によつて年号の確認をした。

- 一 「弘」ヒロム（易林）
- 二 「董」ワラバ（黒本・伊京・易林）。「すかし」賺すの意。慰める。Suckす子供などをなだめ慰める。あるいは撫でかわいがる（邦訳日葡）。「童子（わらべ）すかし」（浮世・日本永代蔵・六・五）
- 三 書物。ここでは後述のような読み物を指す。「弘法をもてかきたる物語なれば、つねの草子にかはりて」（戴恩記）
- 四 山東京伝 宝暦十一年〜文化十三年〜一七六一〜一八一六
- 五 式亭三馬 安永五年〜文政五年（一七七六〜一八二二）
- 六 曲亭馬琴 明和四年〜嘉永元年（一七六七〜一八四八）四、五と共に作家
- 七 狂言綺語の思想に基く。虚偽の文字は罪であるとする考え。願はくは今生世俗の文字の業 狂言綺語の誤りをもつて翻して当来世々讀仏乗の因転法輪の縁とせむ（和漢朗詠集下）。「ぬかれ」は連用形であり、室町時代以降の接続法（以前は終止形接続）
- 八 米沢城。現在の山形県米沢市にあった城。暦仁元年（一一三三）大江時弘創築とされる（日本地名。小国南方。米沢藩領置賜郡下長井のうち）。「上杉領村目録」によれば二十四ヶ村。現在の小国町の南部
- 九 口三十三人、五十七石四斗と記録されている。
- 一〇 本書の舞台となる所。「邑鑑」には、家数六軒、人口三十三人、初めて荒地を開いた人「草創 江戸にてクサワケと云ふ」（守貞漫稿・三）
- 一一 以後、代々の通称名ともなる本書の主人公の名。
- 一二 応仁の乱（応仁元年〜文明九年（一四六七〜一四七七）を指すか。七頁注七までの内容から逆算する）
- 一三 この頃になる。
- 一四 以下の国名は各、南海道の一國。（和漢三才図会）
- 一五 未詳
- 一六 「一族イナク」（黒本・天正・易林）が正しい。
- 一七 地勢が険しくて敵を防ぐのに便利な所「土肥の杉

百子沢 恨報実録

(一)序 執筆の動機

近來、世に広く売弘しはらんべすかしの草紙ノ作者京伝、三馬、馬吟等が作せし草紙は嘘を作りて面白し。大方三、四年たがへには、鬼に舌をぬかれべし。夫が否さに、此実録は嘘のよふに能くほんとの支を作せり。聞人の、嘘つくし、舌を抜んと黒鉄の釘抜をもてり。

(二)発端

抑 米城の西に当て三万石の地あり。此處平領を南方と号。山内にして、田畑は山沢をうがち、となり村江峠壹ツ式ツを越。又は沢々を渉て歩行す。其内に百子沢村と云、纒百五拾石余の小村有。草はけの百姓に兵蔵と云者有。此先祖をノオ尋るに、日本乱世の頃とかや、阿波徳嶋丸龜と忝山と戦し土佐の国渡部土佐守行宗是也。合戦に悉く打負、一属纒百騎に足らずして此山内に命延。其頃、要害の物見櫓を構しせん